

論 文 要 旨

論 文 題 目 沖縄県における終末期がん患者の在宅移行に関連する要因の検討
—在宅移行支援に携わる看護師の調査から—

氏 名 照屋 典子

要 旨

本研究では、沖縄県における終末期がん患者の在宅療養移行に関連した看護支援内容、困難な事柄、病院環境に関する要因を明らかにすることにより、在宅療養移行を促進していく上での課題を検討することを目的とした。がん診療を行う 200 床以上の病院 18 施設のうち、承諾の得られた 17 施設で、終末期がん患者の在宅療養移行に携わっている看護師長、及び看護師 197 名を対象とし、郵送法による質問紙調査を行った。回答の得られた 165 名のうち、記載不備がなく、過去半年以内に終末期がん患者の在宅移行支援経験のある 113 名の分析を行った。113 名のうち、支援を行った患者が在宅療養へ移行できたと回答した者は 63 名、移行できなかったと回答した者は 50 名であった。終末期がん患者の在宅療養への移行に最も関連する要因を検討するために、在宅移行の有無をアウトカムとしたロジスティック回帰分析を行った。その結果、「患者に病状や治療に対する理解度を確認する」、「緩和ケアが必要になった場合、緩和ケアチームや緩和ケア担当医等の介入を依頼する」看護支援が、終末期がん患者の在宅療養移行を促進し、「主治医、病棟看護師、退院支援部署間の連携が難しい」ことが在宅療養移行を阻害する要因であることが示された。以上のことより、患者の最も身近な病棟看護師は、患者へ病状や治療に対する理解を確認し、適切な時期に緩和ケアが提供されるよう他職種との連携や調整を行うこと、また、院内における多職種連携を円滑にすることにより、終末期がん患者の在宅療養移行が促進できることが示唆された。以上のことより、今後、沖縄県における終末期がん患者の在宅療養移行の促進を図るためには、本研究により明らかとなった事柄を遂行することが課題である。

Abstract

T i t l e Factors related to the transition from hospital to home care in terminal cancer patients
in Okinawa -Questionnaire survey of hospital nurses assisting the patient's
discharge-

N a m e Noriko Teruya

Abstract

The purpose of this study was to examine the factors related to the realization of transition from hospital to home care in terminal cancer patients, and to clarify the problems that need to be solved in promoting home care in Okinawa. The subjects were 197 nurses who supported a terminal cancer patient's discharge in 17 hospitals with more than 200 beds that provided medical treatment for cancer patients. A questionnaire survey was conducted by mail. Among the 165 nurses who responded, 113 nurses had assisted a terminal cancer patient's transfer from hospital to home care within the last six months and gave valid responses that were analyzed in this study. In order to identify the factors related to the realization of transition to home care in terminal cancer patients, a multiple logistic regression analysis was performed. Results revealed a total of 3 items as related factors. The terminal cancer patient's discharge was facilitated by "Hospital nurse's confirming terminal cancer patients' understanding of their disease condition and treatment," and by "Hospital nurse's requesting intervention of the palliative care team or a palliative care doctor if necessary." "Difficulties in collaboration among doctors in charge, ward nurses, and the section of discharge support" impeded patient's transfer to home care. To promote a terminal cancer patient's smooth transition to home care, it is important that hospital nurses confirm that patients understand their own disease condition and treatment, and make necessary arrangements for palliative care services to them in proper timing. The findings also showed that it was necessary to facilitate cooperation among various healthcare professionals in patients' discharge planning. Thus, systematic strategies to overcome these problems would contribute to promoting a home care in terminal cancer patients in Okinawa.

(様式第5-3号)

平成24年8月15日

琉球大学大学院

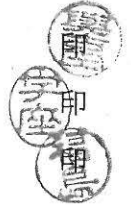
保健学研究科後期課程委員会 殿

論文審査委員

主査 氏名 與古田 孝夫

副査 氏名 宇座 美代子

副査 氏名 福島 卓也



学位（博士）論文審査及び学力確認の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び学力確認を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	氏名 照屋 典子	生年月日	
現住所			
成績評価	学位論文 <input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格	学力確認 <input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格	
論文題目	Factors related to the transition from hospital to home care in terminal cancer patients in Okinawa · Questionnaire survey of hospital nurses assisting the patient's discharge		
審査要旨（2,000字以内）			
<p>本研究は沖縄県内のがん診療を行う病院に勤務する看護職者を対象に、終末期がん患者の在宅療養移行に焦点をあて、看護支援内容、末期がん患者を支援する上での困難事項および病院環境に関する要因との関連について明らかにし、終末期がん患者の在宅療養移行を促進していく上での課題について検討することを目的としている。</p> <p>対象は県内がん診療を行う200床以上の病院18施設のうち、承諾の得られた17施設に勤務する看護師長を含む113名である。分析は過去6ヵ月以内に終末期がん患者の在宅移行支援経験のある者のうち、在宅療養移行が実現したと回答した者63名、実現しなかったと回答した者50名について、在宅移行実現の有無をアウトカムとしたロジスティック回帰分析により検討を行っている。その結果、在宅療養移行を促進する要因として「患者に病状や治療に対する理解度を確認</p>			

(次頁へ続く)

する」，「緩和ケアが必要になった場合，緩和ケアチームや緩和ケア担当医等の介入を依頼する」などの看護支援が関連し，一方で「主治医，病棟看護師，退院支援部署間の連携が難しい」ことが阻害要因であるとの結果を得ている。

本研究結果から，今後沖縄県における終末期がん患者の在宅療養移行を促進するためには，患者の最も身近な病棟看護師が，患者への病状や治療に対する理解を確認し，適切な時期に緩和ケアが提供されるよう他職種との連携依頼を行い，院内における他職種連携を円滑にすることを今後の課題としてあげている。

公開による学位論文審査会では，データ処理を行う上での統計解析上の指摘（具体的には，在宅移行実現の有無をアウトカムとした多重ロジスティック回帰分析において，投入した独立変数間の多重共線性に関して検討の必要性がある）はあったが，これまで終末期がん患者の在宅療養移行に関する研究はそのほとんどが患者・家族を対象としたものであり，また看護職者を対象とした研究においても質的研究が主流で，本研究のように統計学的に検討した調査研究はほとんどなされていない。また，今回得られた知見は終末期がん患者の在宅療養移行を促進する上で看護職者の一つの指標となるものであり，臨床看護に活かせる可能性が高いと考える。

以上のことから，照屋典子氏から学位申請された本論文は，学位論文にふさわしいと判断し合格とした。